

# TRIAL &

# ERROR

JVC 日本国際ボランティアセンター会報誌 トライアル・アンド・エラー (試行錯誤)

[ 特集 ] 「トランプ的世界」でJVCがすべきこと

人権も多様性も否定される  
新しい時代での  
JVCの立ち位置

[ 報告 ] タイNGO若手スタッフの来日

新しい食・流通システムを  
創るためタイのNGOが来日

[ 特集 ] アフガニスタン医療事業の終了

アフガニスタンでの  
12年間にわたる  
医療活動を振り返る

除染処理によって集めた放射性物質／汚染廃棄物を詰め込んだ  
バッグが大量に並べられた風景。こうした保管場所は、福島県内  
だけで14万カ所以上にのぼるそうだ(環境省作成資料 平成29  
年3月作成より)。原発事故の影響を受けた地域のなかには、避  
難指示の解除が進む地域もある一方で、「帰還困難地域」(=い  
まも人が住めない場所)も依然として存在する。そして、そうした  
場所から少し離れば、もちろん福島県内や東北各県にも日常は  
あるし、新幹線で2時間もすれば首都圏、東京に到着する。



[特集]「トランプ的世界」でJVCがすべきこと ■■■■■■■■■■

## 人権も多様性も否定される 新しい時代での JVCの立ち位置

日本国内でのヘイトスピーチやヨーロッパでの右翼政党の台頭。シリア紛争に端を発する大量の難民流出から起きたヨーロッパでの排外主義の発露。先進国における中間層の崩壊…。トランプ米大統領の誕生に象徴されるが、今、市民社会が依ってきた普遍的な理念である人権や多様性が世界的に軽んじられようとしている。この趨勢は、JVCが支援してきたアジアの小農にもどんな影響を及ぼすのだろうか。今、JVCが何をすべきかを検証したい。



当たり前ではない暮らしが  
当たり前になる世界で何をすべきか  
JVC事務局長 長谷部 貴俊

欧米で表面化し始めた排外主義、中東で激化する紛争、加速するグローバル資本経済。だが民衆レベルでは、イラクでは街中での爆発事件は日常の一つとなり子どもたちは道路脇で遊び、南タイでは屋根のない掘立小屋に隣国からの出稼ぎ家族が住み、日本でも放射性物質を詰めた無数のフレコンバッグがある福島県からわずか2時間で普段の東京がある。当たり前ではない世界が当たり前になる。そのなかでJVCが支援する人たちはどんな社会を望むのか。JVCはどう応えるのか。それを考えるときが来た。

一つの世界に我々は  
生きているのか？

いつだったか、福島第一原発の爆発に端を発する除染作業が始まり、仮設住宅から公営住宅や他地域に人が出始めた時、福島県南相馬市を訪ねた。NPO法人「つながっぺ南相馬」(注1)の、仮設住宅でのサロン管理をしている女性スタッフが、

「最近ね、除染作業員で来ていた南米の日系の方が、仮設に入って女性

の下着を盗んで、自分の体につけていたんだって(笑)。警察に捕まってるね。盗んだ男は若い女のものと思っただけど、今は若い人なんて仮設に住んでないでしょ。盗んだのは、おばあちゃんの下着だったんだよ」とケラケラ笑って話してくれた。私も一緒に笑ったものの、心のなかでは二重三重の意味で、複雑なものを感じた。

幼少時、家族と何度か泳いだ南相馬の海。福島市に住む祖母は、「南

◎注1…南相馬の住民が立ち上げた。家族を失った住民への居場所づくりのため、お話しする場や、カラオケや簡単な運動を取り入れている。JVCは2012年から、資機材の支援や運営のサポートをしている。



事務局長就任から5年、JVC 各国事業の視察を続けている長谷部。事業そのものに関わるだけでなく、訪れる土地の風景を見て、そこに暮らす普通の人々の声にできる限り耳を傾けてきた。「外から来た支援団体」、そう見られる立場と限界を理解しつつも、できるだけ同じ目線に立てるよう配慮し、そこから見えてくること、そして目には見えてこない課題も捉え、ともに取り組める関係性をつむいでいく JVC の姿勢に、今も変わりはない。

相馬に行ったのか？ 昔よくみんな海に行ったな。懐かしいな。でもな。放射能で海の色も変わっちゃまったべ？」と私に震災直後に問いかけた。

2011年と同じく、今も南相馬の海で泳ぐ人はいない。南相馬から、バスで除染処理の黒いビニール袋がいたるところにある飯館村を通り、福島駅から新幹線で2時間のうちに高いビルばかりの東京に戻る。いつもこれが同じ日本なのかと感じてしまう。

日本だけでなく、ふとこの1年間で会った人々を思い出した。カンボジアの農村で栄養を取っていないから体調が悪いと、急にしゃがみだす村の女性たち。イラクでは、頻発する爆破に慣れっこになってしまい、そんな地域でも普通に道路脇で遊ぶ子どもたち。南タイで、屋根のないガレージや掘立小屋に住むビルマ／ミャンマーからの移住家族たち。

彼ら、彼女らにとって当たり前で

普通の暮らしが私の想像を超えており、目に浮かんで、どう考えていいのかわからなくなることがある。

### トランプ大統領の登場

数々の勇ましい演説をし、アメリカ・ファースト（アメリカ第一主義）と叫び大統領に就任したトランプ氏。まさか大統領になるとは思っていなかった？が、それは自分がアメリカ社会をきちんと認識していなかったためだろう。

アメリカの世論調査機関によると「米中間層家庭に暮らす成人の割合は15年には50%と、71年の61%から縮小した。15年の高所得層の割合は21%（71年は14%）、低所得層の割合は29%（71年は25%）とそれぞれ上昇した」と指摘している（注2）。中間層の解体は日本やEU諸国でも現実に直面している。つまり、トランプ現象は単にアメリカだけの問題としてではなく、世界の多くで共通した問題があり、そのなかから出て

## 排外主義が背景にある、 もしくはその背景にあると 言われている近年の主な出来事

2013~14年	日本、ヘイトスピーチ／デモが各地で発生
2014年	シリア(やイラク、アフガニスタンなど)から、北アフリカ→地中海→イタリアへの難民が増加
2015年以降	イタリア／ギリシャからEU各国へ大量の難民が移動
2015/1/7	フランス、政治風刺週間新聞「シャルリー・エブド」襲撃事件
2015/2/11	日本、産経新聞に曾野綾子氏による人種で居住を分けることを是認する内容のコラムが記載
2015/11	フランス、パリでの同時多発テロ事件(実行犯の一部がシリア人難民だった)
2015/12/31	ドイツ、ケルンで集団性的暴行事件(実行犯の一部が難民だった)
2016/6	イギリス、EU離脱が国民投票で決定
2016/12	米トランプ大統領による、中東・アフリカ7か国の国民の入国を一時禁止する大統領令

参考 2017年3月: イギリスのEU離脱交渉開始、オランダ議会選挙  
4~5月: フランス大統領選挙、秋: ドイツ連邦議会選挙

きた一現象と捉えるべきだろう。

ここでは、JVCとしても世界の動向を捉えていたほうがよいのではと考える課題点をあげる。

一つ目には排外主義の問題、多様性に対する危機。塩原良和慶應義塾大学教授は、ヨーロッパにおいて「人種や民族などによって差別されずに人々を社会に包摂し、公正な社会をつくることをめざすのが多文化主義だった」が、不十分な形でしか導入しなかったことを指摘している。そ

のため、レイシズムや社会的なさまざまな不平等、不正によって、社会の底辺に構造的に追いやられてしまう人々との憎悪が生まれ、「ホームグロウン(地元育ちの)テロリスト」も生み出したと指摘している(『多文化社会読本』【東京外国語大学出版社】より)。

塩原教授の指摘は、今後の日本社会を考えるうえでも、海外活動を実施するうえでも十分考慮に入れるべき点だ。なお、16年だけでもEU諸

国にシリア、イラク、アフガニスタン始め中東やアフリカから100万人以上の移民や難民が到着しており、さらに排外主義に拍車をかけるおそれがある。

二つ目には、紛争のますますの激化と軍拡競争。米国、中国は国防費を大幅に増加するとして、トランプ大統領は「ISを殲滅する。北朝鮮にもあらゆる手段を取る用意だ」と鼻息が荒い。日本での動きも例外ではない。日本政府の後押しもあり、過去数年、さまざまな形で武器輸出を推進する日本企業の数は少なくない。

三つ目は行き過ぎた資本主義経済の加速。資本主義自体を否定する意見を持たないが、実体経済と金融・資本市場のアンバランス、格差の拡大、ルールを無視した資源収奪の加速などの一連の動

きは社会全体を壊していくだろう。またアメリカはTPPから離脱したが、国益を第一とした形でどう経済を立て直していくかが、一番の関心事項だろう。

ここですべてを述べることはできないが、三つ目の点からカンボジアの状況を考えてみたい。



15年4月、イラクのモスルからISの攻撃で逃げてきた人々のいるスレイマニア郊外にあるキャンプ。



経済発展が続くカンボジア、その首都プノンペン



打ち棄てられた家。農村部では家族ごと都市に出稼ぎに出るケースも

## ますます取り残されて いく人々がいる

カンボジアは観光と縫製産業が牽引役になり経済成長率が高く、10年以降では毎年6〜7%とASEANの優等生と言われている。プノンペンやシエムリアップの中心地の発展はこの10年ほどで驚くばかりだし、日系企業の数も飛躍的に伸びている。一方、農村部はどうだろうか？

15年ほど前、別NGOの仕事で同国に駐在したが、その時と比較して暮らしが良くなったとかいえば、子どもの就学率は若干高くなったが、全体的に厳しいまま。果たして成長の恩恵はどこに行ったのだろうか？

「乾季になると多くの人が出ていく。村に残ると結婚式シーズンだから、お金がないのにお祝い金が何度も出ていくばかりでいいことないよ」と16年1月に出会った加工品グループの女性は嘆いていた。14年実施のJVCでの調査では、対象村チークリエン郡1200世帯のうち、約40%が国内かタイに出稼ぎに行っていた。この傾向は現在ますます強くなり、ある村では、中学を卒業するとほぼ全員が村を離れると話していた。1ヵ月タイで働くと300ドルから500ドル稼げるという。

出稼ぎで村に人が少なくなるため、田植えの際、JVCが研修してきた幼苗一本植えは労働集約型のため行えず、手間の少ない直時じかまきに変わる村人も多い。

また、カンボジアでは国全体を見ると、違法伐採などの理由でこの4年間で森林被覆率は15%も減少したとの報告もある。企業をはじめ国内外のさまざまな利権が絡み、食料や材木を森から採っていた地元住民が利用できなくなるケースも多いし、カンボジアで著名な選挙監視NGO、COMFRELは「政治対話は有害なレベルまで悪くなり、国会は機能不全である」と発表している（プノンペンポスト17年2月22日）。

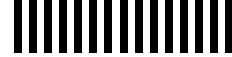
村の人々はこのような社会で希望

を見いだせるのだろうか？ そんななかでも「必要な木材や食料などを森から取りながらも村の森をきちんと守っていきたい。近くの村ではそれができなく、村人が森をなくしてしまったところもあるからね」という村のリーダーにあった。

厳しいなかでもこれまでの研修の成果で、栄養価が高く、栽培が比較的簡単なチャヤなどの植物をきちんと育てる家庭も多く見られるなか、我々と村人との試行錯誤は続く。

## なぜ現場に 立ち続けるのか？

JVC顧問の熊岡はJVCへの関わりを敗戦の記憶、ベトナム反戦運動があったうえで、「直接的に運動に関わったのは、紛争があったからという状況に加え、一人ひとりの難民の苦境が具体的に報道されるなかで、メディア報道に影響されたという側面は、個人としても団体としても大きい」と語っている（『NGOの源流をたずねて』、めぐん）。



私も含めた現在のJVCスタッフの関わりも、世界の紛争や飢餓をメディアでみたこと、直接的な個人の経験としてなにかしら「世界を感じた」ことがきっかけになっている。一國主義でなく、世界を同じ社会と考える視点に基づいている。

これらにプラスして、JVCは設立時から単に見える事象だけを捉え、社会のなかで周辺化された人々を単に支援し伝えるだけではなかった。常にその個人や家族が置かれている社会の文脈や歴史のなかでも位置づけを考え、その結果として出会う人の暮らしや出来事を考え、支援してきている。

今、果たしてそれがどこまでできているのだろうか？

さらに自問は続く。私が出会い、支援の対象とする方々の生活世界の内面をどこまで理解しているのだろうか？ 自分の理想とする人間像や社会像を支援対象者に押し付ける危険がないだろうか？ 現場の市民社会の声やJVCとは異なる視点をもつ

人たちがどう社会を考えているか、わかっているだろうか？ つまり、見たいものだけ見ようとしていないか？…と。

JVCは大きなものの見方や理念から発信するのではなく、現地で活動するなかで、我々日本人にとって当たり前ではない暮らしが地元の人にとっては普通の暮らしとなっていることを、単なる事象としてだけでなく、見えないこと、つまり構造も含めて発信してきた原点を見つめ直すときだろう。

「将来の社会構想がない時代」、「共有する展望が欠落している」といわれる現代社会で、我々の国内外での活動を単なる支援と捉えず、社会はどのようなになったらよいか、その完成までこれから100年かかるかもしれないが、そのささやかな試みをする、それがJVCの役割だろう。

## 4月上旬の米国によるシリア空爆に関して

JVC事務局長 長谷部 貴俊

4月4日に起こったシリア国内での化学兵器使用疑惑事件は、6日に米国がシリア軍に向け空爆を実施する事態となり、9日に安倍首相はトランプ大統領に空爆への支持を表明しました。また、11日、日本も含むG7外相会合の共同声明で米国のシリア攻撃が容認されました（この時点では、まだ化学兵器を使用した主体の検証はできていません）。

化学兵器の使用、今回の米国の攻撃も含めシリア国内でのあらゆる武力行為は決して許されるものではありません。「対テロ戦争」の現場、アフガニスタン、イラクで活動し、今も現地で続く暴力の連鎖を見てきた中で、今回の米国による力の行使はさらなる事態の混乱を招く恐れがあると考えます。だからこそ、各当事者や国際社会は、武力によらない和平プロセスを進めることが重要です。JVCは、今後シリアに関わる日本のNGOと連携してアクションを取っていくことを検討していきます。









若手農家のグループ、あいよ農場  
(千葉県東金市)。生産計画や販  
売方法の工夫などを学んだ

民として誇りと尊厳を持ち、自立した農業運営ができるよう、互いの地を行き来する経験交流を続けてきた。今回、訪問したアジア学院、生活クラブ連合会、あいよ農場、三里塚ワンパック野菜(以下、ワンパック)はいずれも農民交流で培ってきたネットワーク(仲間)だ。

**生産者と消費者が  
もっと深い関係になる。  
社会を変える**

来日5日目に訪れた「自給農園ミルパ」(千葉県成田市)は、16年春に開園した市民農園だ。農業・化学肥料を使わずに土づくりをしてきた畑を会員に開放している。百姓歴50年の石井恒司さんはミルパを設立した理由を話してくれた。11年3月11日の東北大震災後、東北での農産物の放射能汚染を不安に思ったワンパックの会員の何人かが契約を解消。長年の付き合いでも、ほんの少しの不安だけで消費者が去った現実にも、「生産者と消費者を

つなぐものは『安全な食』だけでは足りない。両者をもっと深く強い関係になるには他の方法が必要」との考えに至ったという。

ミルパでは、会員が安全な野菜を自分の手でつくることを重視する。会員が忙しく農園に行けない時も、運営側は除草などをしない。作物がどんな過程でできるか、そこに人がどう手をかけるかを分かってもらいたいからだ。

「安全・安心」だけなら、お金さえ出せば買えるかもしれない。けれど、それでいいのだろうか。山形県長井市で百姓を続ける菅野秀さんは言う。「作物は土で育つ。砂地では育たない。土は、これまで生きてきた命の遺体の集合体。生きている以上、生産者・消費者の別なく、命の受け渡しに参加しているのだ」  
お金の存在はしばしば、脈々と受け継がれた有機的なつながりを飛ばし、「いま・ここ」での快適さや便利さに意識を奪うことがある。消費者もまた、自然の恩恵にあずかる生態系の一部であることに無自覚ではないと説いたのだ。

2つの現場を訪れたタイのメンバーは、「どちらも新しいことに挑戦し、生産者と消費者の関係改善に努めている。それは勇気をもって、問題に向き合い、より良いものを創り出すために、社会を変えようとしている姿勢だ」と話した。

「生産者と消費者が対等な立場で互いを支え合う関係」や「土と人の有機的なつながり」をどう創るか。タイでも向き合うことになるであろう大きな問いを今回のプログラムを通じて得ることができた。

**答はひとつではない。  
だから、国を越えて  
模索し続けよう**

今回のプログラムを共につくり、参加したスパークさんは言う。「新しい社会を創るためには、世界の多くの国と人々が手を取り合い共に活動していくことが必要だ」

私はスパークさんと06年に出会って以来、彼女や彼女が代表を務める団体SAFTと連携しているが、10年が経過するなかで、タイの農村開発NGOの活動も、消費者を含めた活動に移行し始めている。



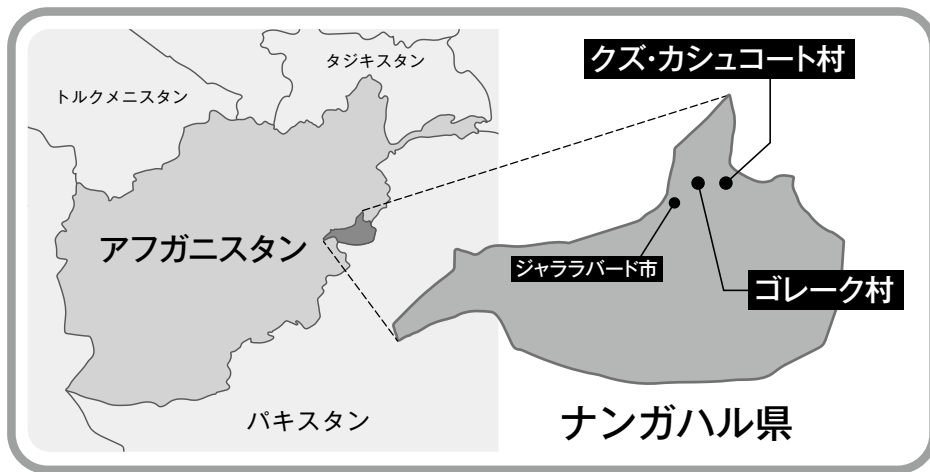
三里塚ワンパック野菜の仕組みを説明する金森さん。JVCタイのインターンシッププログラム11期生でもある。

JVCタイも、農業だけにとどまらず、都市貧困やエネルギー問題など様々な分野と関わりを持つようになった。そして、この間にJVCのビジョンと同じ未来を描こうとする仲間が確実に増えた。

この経験からJVCタイは刺激と勇気を与え続ける「交流」と「学び合い」の力を信じている。そして、この仲間たちと共に、答えなき地球的課題の解決方法を、国を越えて模索し続けていく。

「交流」と「学び合い」に終わりはないのだ。





コート簡易診療所も)。JVCは、診療所運営と並行して保健活動も実施した。農村地・山間地での生活環境は特に厳しく、安全な水などの基本的ニーズさえ十分に満たされていない。JVCは多くの病気が日常のな

かで予防できるとの理解を広め、住民主体で栄養・衛生の改善策が実施されるよう、伝統産婆の研修、母子の健康などの知識伝達の場合として母親教室、学校での健康教育、村の指導者たちによる「保健委員会」の結成などを推進してきた。

診療所の運営は週6日。一般外来は1日平均100名（簡易診療所では平均60名程度）、多いときには150名を数えた。

診療所といっても、電気も上下水道もない村にポツンと置かれた建物である。医療者の手洗いには専用のタンクに井戸水が入られ、石鹸とブラシが常備してある。ワクチン保存用冷蔵庫と医療器具の滅菌消毒用オートクレーブはプロパンガスで稼働。注射器・針はすべて一回きりの使い捨てタイプである。かつて同国で行われていたという注射針の使いまわしによる感染はない。

治安状況による現地訪問制限や言語の壁もあり、日本人スタッフが実際の診療所運営をつぶさに観察するのは困難だが、予告なしで訪れた際にも清掃が行き届いており、医薬品

をはじめとする備品も整然と保管されていた。

### 「家族カルテ」導入の苦勞

JVCの診療所は、カルテ抜きには語れない。

考え難いことだが、アフガニスタンの病院では、医療体制の未整備からカルテがほとんど使われていない。患者の病歴や薬の服用歴が考慮されず、その都度の診療が行われて

いる。

JVCの診療所でも当初は「氏名、性別、年齢、居住村名」を記入するハガキ大用紙だけが診療記録だった。だが、一日100人以上を診察する医師が診察内容まで覚えていたとは考えられない。その課題克服のため、カルテ導入に踏み切ることにした。

患者には風邪、肺炎、中耳炎、下痢が圧倒的に多く、家庭の衛生事情の改善でかなりの予防が可能だった。

年表	
2001年10月	緊急支援開始 医薬品・食糧の配布
2002年	無医村地域での巡回診療
2004年	伝統産婆研修開始
2005年	ゴレーク診療所運営開始
2008年	クズ・カシュコート簡易診療所運営開始 母親教室開始
2010年	「家族カルテ」導入
2011年	村人による「保健委員会」結成 カルテを活用して家庭個別訪問開始
2014年	家族健康アクショングループ発足 (母親教室の発展系)
2015年	学校保健協議会発足 (教員による校内保健の取り組みを推進)
2016年12月	診療所移管
2017年～	地域保健活動を継続、 新たな分野での活動開始



2002年、緊急支援医薬品の提供を開始した。

た。そのため、個人ではなく一緒に暮らす家族単位での受診状況を把握する必要があり、家族全員の受診歴を一つのノートに記録するのが効果的と考えた。それがJVCオリジナルの「家族カルテ」(Family Health Book)である。だが――。

医療関係者を含む日本側スタッフからのこの提案に、現地スタッフは大反対した。必要性と意義は理解しつつも、「全家族の構成員を全て把握する難関が越えられそうにない」「管理の手間がかかりすぎる」という理由だった。

しかし、日本側としては、慣れれば最低限の人員でも運用可能と考え、話し合いが膠着状態になるなか、「とにかくまずは一カ月！」と現地スタッフを説得し、10年、トライアルに踏み切った。

### カルテの成果と課題

カルテは、半年、一年…となんとか継続。やがて、初めは大きな抵抗を示した現地スタッフが、棚にきちんと番号順に整理されたカルテを誇

らしげに見せるようになり、13年頃からはカルテを使い受診回数が多い家族を選出し、家庭訪問で必要な保健衛生上のアドバイスにも活用するようになった。カルテ自体が存在しない同国において、この実践は大いに評価できる成果である。

しかしながら、カルテ活用は担当医の意志と人員の確保に大きく拠っている。

患者一人に割ける時間は2〜3分というなか、ノートをめくり本人のみならず家族全体の状況まで把握するのは至難の業。それは時間だけの問題ではなく、「病気ではなく人を、その背景の家族と地域を含めて診る」という根本姿勢を担当医が持っているかにもかかっており、同国全体における家族カルテの持続性については残念ながら未知数である。

導入以来、様々な機会をとらえ、他の医療支援団体や保健省に、カルテを国レベルでの制度としての採用を働きかけてきたが、意志や人員不足の問題から成功していない。その努力を継続しながらも、せめて診療所の移管先の現地NGOが引き継い

でくれるようにと働きかけている。

### 地域保健との連携。

合言葉は「治療より予防！」

もう一つ、診療所が力を入れてきたのが、地域保健との連携である。例えば、住民の指導者たちが集まる保健委員会の定例会で、診療所で集計したデータを共有し、流行している疾患などを知らせ、対策に役立てられるようアドバイスをを行う、マラリア患者の増加時期に、感染者の早期発見を行うキャンペーンを実施したいと提案した保健委員会メンバーにマラリア検出試薬の使用法実習を行う、診療所内のスペースを使って保健委員会や教員グループに向けて健康教育など各種研修を行う、といったサポートである。

これらの活動の合言葉は「治療より予防!」。そのために、村の人々が日常生活のなかで衛生や健康への意識を高め、リーダー的存在の住民が中心となって保健活動に取り組めるよう、診療所が持つ人的・財的リソースを多に活用してきた。これは特筆に値すると自負している。



予告なしの訪問でも家族カルテが整然と棚に並んでいることが確認できた。カルテを使って受付と診療をスムーズに行っている。

こうした取り組みの甲斐もあって、JVCアフガニスタンは優れた医療保健サービスを提供したとして、これまでに幾度か同国保健省から表彰を受けている。

### 現地団体への診療所移管にあたっての葛藤

16年12月下旬、12年間にわたる診療所と簡易診療所の運営は、新たに

アフガニスタン保健省と契約を結んだ現地団体AADA(注1)が引き継いだ。

運営移管の理由となった大事な点が、持続性の問題である。じつは、数年前から現地スタッフと、この公的施設である診療所はやはりできるだけ早く本来の責任主体である現地政府に、または少なくともアフガニスタン現地の団体の手に委ねるべきだと議論を重ね、そのタイミングを探っていた。移管先候補のNGOとまずで協議を重ね、移管しても地域保健との連携やカルテの有用性など、JVCが大事に積み重ねてきたものを引き継いでもらえるように伝え、相手の意思を確認してきた。

また、診療所運営には施設維持費、医薬品代や人件費などの多くの経費が必要だが、その多くを日本政府の補助金で賄っていたJVCには、何年も先まで安定して資金を確保できる保証はない。

村の人々にまず伝えなければならなかったのは、決してJVCは診療所を軽視して手放すわけではなく、長期的な視点に立ち、人々の拠り所

である診療所が村に残り続けるための判断だということだった。

一昨年ほど前から村の長老たちには診療所移管の意向を伝え理解を求めてきたが、他の地域の診療所と比べ医療サービスの質が良かっただけに、村人からは非常に惜しまれ、「どうか続けてほしい」との言葉を多く投げかけられてきた。また長年の仲間である診療所スタッフとの別れも意味するだけに、厳しい判断だった。しかし、診療所は現地団体が引き継ぎ、保健省が定める基準に沿って医療は提供され続ける。

JVCはこの地域から去るわけではなく、他にも数多くの課題を抱えている同国において、医療保健に限らず、新たな分野でも住民グループが主体となり行う活動により注力していくという意思表示でもある。

### 医療的価値を超える診療所の役割

すべての人の命を守る医療機関であるという点で、その必要性は言うまでもないが、診療所はそれ以上にJVCの拠点であった。地域住民に

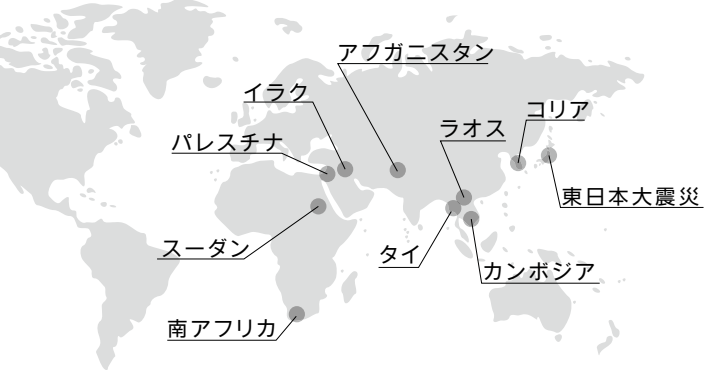
すれば外部者であるNGOの——しかも外国の——JVCが活動するのに不可欠な、人々からの「信頼」の構築に大きな役割を果たしてきたからである。

活動開始当初、ワクチン接種や母親教室の開催に難色を示す住民がいたが、JVCはその土地の文化を尊重する姿勢をはっきり示しながら、これらが純粹に健康を守るための支援であることを伝えてきた。

「西欧的思想やそれに追随する政府」という批判などから活動停止を警告する脅迫状を送りつけられた団体も数知れないなか、JVCは幸い、警告や妨害を受けたことはない。長年にわたり真摯に患者を診てきたJVCの診療所支援があったからこそ、その他の活動にも村人の信頼を得られたのだと考えている。

診療所移管後の17年からは新たな課題と向き合っていくJVCが、一朝一夕ではかなわない村人からの受容と信頼、そしてそれ以上の積極的な協力を得るためにも、診療所の価値と運営を行ってきた実績は生き続けていくのだと信じている。

◎注1…Agency for Assistance and Development of Afghanistan 特に保健分野で実績のあるアフガニスタンのNGO



JVCは現在、10の国・地域で活動しています。

# プロジェクト一覧

12月後半～3月前半

## アフガニスタン

地域保健医療事業／教育支援(ナンガルハル県)／アドボカシー

村人グループの自主性・持続性を高めていくために、村の指導者たちから構成されている「保健委員会」の組織強化の研修を行っている。この間、将来的には保健委員会メンバー自身でも資金調達が可能となるよう、基本的な申請書の書き方などを研修で扱った。

その実践も兼ねて、保健委員会が提案する小規模な保健プロジェクトにJVCが資金提供することを伝えたとこ、合計11の申請書が提出された。最もニーズが高く、かつ実現可能なプロジェクト案が選ばれ、実施されている。そのひとつ、バンガオ村の保健委員会はマドラサ(宗教学校)の隣に、特に子どもたちが通りなどで排泄をし

ないよう、公衆トイレの設置を提案した。必要な経費の約半分は村人から寄附を募り、労働力や資材の提供も受けるなど村の側からの協力も得た。建設が終了した今後は保健委員会と協議の場を持ち、管理責任者や使用のルールを定める。

FHAG(家族健康アクショングループ)という女性を対象とした月に一度の定期的な健康教室は、事業全体をコーディネートする男性職員が中に入れないため、活動の様子や進捗を把握



完成したバンガオ村の公衆トイレ

するのに苦労してきたが、読み書きができるメンバーが定例会の記録を取るようになったことで、より情報を得られるようになった。何より、活動の記録が村の中にも残るようになったことは大きな進展である。(加藤)

## スーダン

紛争による避難民・難民への支援(南コルドファン州)



老若男女がともに学ぶ識字教室(ヒル・ジャディーン地区)

◎出生登録支援：避難民の子どもたちが就学の機会や医療保障を得るために必要な出生登録の支援を実施している。914名の子どもたちの出生登録証が発行された。今後の支援の準備として、新たな対象地域の家庭訪問を実施している。またこの支援と連携する形で、子どもたちが学ぶ場としてムルタ男子小学校やザハラ女子小学校の改築を始めている。

◎識字教室：1月末より3ヵ月のコースで、アラビア語、算術を学ぶ教室を開講した。授業科目の他に実生活で役立つ、保健衛生などの知識の時間も設けている。4地域11教室、各教室40名前後の参加者からは、熱心な態度と学ぶ喜びが教室内にあふれている。

その他、支援が完了した給水事業・野外トイレ整備のその後の使用状況などのモニタリングを行った。(橋本)

## イラク

JVCスタッフがイラクを訪問



「インサーン」のスタッフからキルクークで実施した平和教育について説明を受ける

2017年2月上旬、JVCスタッフがイラクを訪問した。「インサーン」のスタッフや関係者から、活動地であるキルクーク市の避難民の状況や、平和教育の成果について聞き取りを行ったほか、今後の活動について話し合った。

キルクーク県では、多数の避難民流入に伴い、物価高騰や賃金低下が深刻化しており、避難民と受け入れ地域住民間の新たな摩擦も懸念されている。また、過酷な状況におかれている子どもたちは特に大きな影響を受けている。

国内避難民の子どもたちと地元住民の子どもたちが交流し、「共生」や「平和」を学ぶ場をつくることで、避難生活の長期化に伴う地域内の緊張を和らげることを目指す、本年度の活動について話し合った。(池田)

## パレスチナ

栄養失調予防事業／  
若者のレジリエンス向  
上事業／アドボカシー



ガザ事業での家庭訪問の様子。新生児のケアに関してパートナー団体のボランティアがアドバイスを行う

◎栄養失調予防事業（ガザ地区）：この3ヵ月間で1,577人の児童に栄養状態検査（第3期フォローアップ）を行い、1,004人の女性へのカウンセリングを行った。また、講習会や調理実習を104回実施し、1,480人の女性が参加した。今まで2013年から4年続いたガザ北部・ジャバリアでの子どもの栄養改善事業は、3月末で終了の予定。本事業ではボランティアの女性たちがイニシアティブを発揮しやりがいを持って取り組んでいる一方、ガザ全体の失業率や経済停滞は深刻である。貧困地区の家庭では、知識はあっても栄養のある果物や野菜を買う資金がないという根深い問題もあり、アドボカシーを通じた封鎖解除の必要性が痛感される。

◎若者のレジリエンス・地域保健の向上事業（東エルサレム）：16校の学校が11地域で活動することが決まっており、春学期に入った学校では各保健委員会のトレーニングが進んでいる。パートナー団体のMRSと今後のフォローや協働キャンペーンについて協議した。

◎アドボカシー：イスラエルによる土地収奪の脅威にさらされているパレスチナ人の村（C地区）で、農業を通して同村が自立した生活を送れるよう活動するNGOを支援している。JVCが支援していた溜め池の建設現場を日本から来た専門家とともに視察、今後の可能性について協議した。（山村）

## タイ

日・タイ経験交流／  
医療支援（タイ南部）



タイの保健制度について説明するFEDのスタッフ（タイ南部）

◎11月に行なった交流プログラムの振り返りを1月に行なった。次の展開として日本の市民農園と生活協同組合についてじっくり学び、消費者の参加をどのように促しているのか、その方法を学ぶプログラムを次年度に計画することを話し合った。また11月の交流プログラムをまとめた冊子（タイ語版）を制作した。（下田）

◎パートナー団体FEDを通して、医療費補助、健康保険加入、病院での通訳サービス支援などをパンガー県で継続した。なお、16年度当初計画でかかげた通りで、これまでの支援は今年度いっぱい終了する。FEDとの話し合いの中で、今後、南タイでの緊急支援、東南アジアにおける移住労働者の問題に関する政策提言などで連携・協力を模索することを合意した。（長谷部）

## 南アフリカ

HIV陽性者支援  
（リンポポ州）



ボドウェ村DICに通うマーティンさん（16歳／写真左）の家庭菜園。村内菜園トレーナーのフローレンスさんが日々訪問、サポートしている。

2016年度は、困難な家庭環境下にある子どもが通うケアセンター（DIC / 2村）で、10代の青少年との活動に注力、家庭菜園づくりや青少年による村内でのHIV/エイズ予防啓発、保護者との関係づくりを行ってきた。その結果、子どもや保護者の間でDICへの理解・関心が広がり、今年に入り、約40名の子どもたちが新しく参加した。12月下旬～3月は、2015年度までに育成してきた活動村在住の菜園トレーナーとJVCが、青少年約30名の畑を定期的に訪問しており、実践が定着しつつある。1月25日に、新しく通い始めた青少年約30名を対象に菜園づくり研修を実施した。

3月10～12日に、他地域のDICを訪問、JVC活動地（65名）を含む3団体から青少年約105名が参加、交流した。お互いの活動から学ぶだけでなく、男女分かれての性差に関するセッションなども設けた。（渡辺）

## ラオス

農業・農村開発／  
土地森林保全事業  
（サワナケート県）



研修で得た学びを他のスタッフと共有する様子

11月10日のプロジェクト終了以降、新規事業の開始に向けてMoU（現地政府との活動契約）取得作業を進めている。12月には新規プロジェクトの概要を県、郡行政に発表し、意見交換する会議を持った。この会議を受けて、関係書類を県に提出した。また、プロジェクト終了にあたって郡行政に移管した活動のフォローアップを行った。農村開発活動では、郡行政による「米銀行」の設置を支援したほか、稲作技術とラタン植栽の技術や経験をまとめたマニュアル作成した。土地森林保全の活動では、1村で進めていた「共有林」の規則の改定を完了させた。

次期プロジェクトに向けて能力開発のため、スタッフが様々な研修に参加した。「参加型土地利用計画」における村人の参加や土地利用図作成技術に関して、ラオス政府とスイス政府による土地利用計画プロジェクトに担当スタッフが12月から携わっている。また、1月にアドボカシーに関する研修に2名が参加し、村の森林保全に有用な法律、政策をいかす方法を学んだ。2月にはジェンダーに関する研修に男女1名ずつが参加し、男女間の平等な参加による村づくりについて学ぶなど、多くのスタッフが学びの機会を得た。（山室）

## コリア

### 絵画交流

『南北コリアと日本のともだち展』



会場では、東アジアのともだちに届けるメッセージを込めた＜凧＞を制作、みんなで凧揚げも楽しんだ。

一年をしめくくる東京展を、2月中旬にアーツ千代田3331（千代田区）で開催し、日・朝・韓・中に住む子どもたちが「わたしの一日を紹介します」のテーマで日常生活を描いた作品約184点を展示した。3日間で450名の来場者があった。今年度は、東アジア共通の伝統遊び道具＜凧＞を各地域で制作。その作品約100点が会場を彩ったほか、「東アジアの空に平和を呼ぼう」のテーマで子ども対象の凧づくりワークショップを実施、またギャラリートーク「おじいさんの凧」では朝鮮半島の凧を切り口に在日一世の方のお話を伺った。

◎大学生交流：平壤訪問に同行する日本の大学生と平壤外国語大学生による「日朝大学生交流」が5年目を迎え、過去の参加者を交えたトークでこの取り組みを振り返った。「南に行けない平壤の学生と板門店を訪問し、南北分断や日本の植民地支配が歴史ではなく現在の問題だと実感した」という学び、「続けてきたからこそ互いに壁も感じるようになっていくが、次に何をしたいか約束しあえる関係を築けていることは進化」などの発言が、90名近い来場者に深い印象を残した。

（寺西）

## 気仙沼

ししおり  
鹿折地区での  
復興支援



養殖業者からワカメの生育について説明を受ける参加者

2月5日、防災集団移転のアドバイザー派遣事業を実施し、防災集団移転に係るアーカイブについての協議を行った。2月18日、19日、浦島地区の地域資源をいかしたツアー「週末は気仙沼。～海の仕事と人に出逢う旅2017～」が開催された。当日はワカメの刈り取りや牡蠣むきの体験作業、まちあるき、震災の語り部などが行われ、東京や長野などから参加した人々に地域の魅力を提供した。参加者からは「地元の方々が温かく接してくれたことが一番印象的だった」、「今回は1人で参加したが、今度は友人や家族を連れて来たい」といった感想が寄せられた。

浦島地区の活性化を目的としたNPO法人の立ち上げについては、引き続き住民有志との間で協議を進めている。鹿折地区災害公営住宅のコミュニティ形成に向けて、行政や地元支援団体と連携し、入居者対象の顔合わせ交流会を行った。また、団地内の自治会の結成に向けた住民会合も開催し、延べ106名の参加を得た。会合では、自治会の結成に取り組む中心メンバーの選出について協議が行われた。（伊藤）

## 南相馬

### 仮設住宅でのサロン運営

2012年1月より南相馬市鹿島区の仮設住宅4ヵ所で開催してきた「常設型サロン活動」が終了を迎えた。JVCが活動していた仮設住宅住民の転居先はほとんど決まっており、それを確認しての終了となった。住民が多く残る仮設では、年度初めから仮設住宅自治会と協議し、自治会でサロンを継続できる体制をつくってきた。

大町災害公営団地での住民主導による「サロン活動」に対する支援も継続してきた。この間、徐々に団地住民だけでなく近隣の住民もサロンを利用するようになり、地域に団地住民が溶け込んでいくきっかけとなった。また、他災害公営団地でのコミュニティづくり活動開始のため、行政や他NPOとの協議を継続する。

（白川）

## カンボジア

### 農村における生業改善支援／環境教育／資料・情報センター

森林の減少傾向が続くカンボジアにおいて、環境教育の一環として村の歴史やかつての暮らしを長老から聞く活動を3つの村の小学校で実施した。ペーン村では、村の始まり、村の名前の由来、村の精霊林、埋葬林、過去の物語や風習などについて長老が語った。その上で今はそうした森もなくなり、人々の暮らしも変わってしまったことを説明し児童からもたくさんの質問が寄せられた。他の2校においても同様で、関係者すべてにとって関心の高い内容となった。また、フォレスト・ウォークと称して、環境省管轄の保護林、共有林（コンサエン村）に児童が訪問し、住民からなる管理委員会から森に生えている木、植物、動物についての説明を受ける活動も実施した。

（長谷部）

## 調査研究・政策提言

### 外務省・JICAとの政策協議／各種提言

◎NGO・外務省定期協議会2016年度 第3回ODA政策協議会／第3回連携推進委員会（2月23日）：谷山が参加。

◎NGO-JICA協議会 2016年度第四回（3月16日）：長谷部が参加。

◎第64回財務省・NGO定期協議会（2月24日）：高橋が参加。

◎外務省・JICA・NGOプロサバナ意見交換回（第20回：1月24日）に渡辺、高橋が参加。

◎昨年11月にモザンビークから現地の農民／NGO関係者を招聘した際に、それに合わせてJICAがモ国政府関係者を招聘／参加させようとしたことに対して抗議声明を12/7付で発出した。後日JICAから返答はあったが、事態の改善は見込めなかったため、抗議文を再度12/27付で発出した。（渡辺）



# JVC STAFF

去年一番の思い出を  
教えてください。

## 東京事務所



前列左から：細野、宮西、谷山、大村、寺西  
後列左から：(井川、)池田、稲見、小野山、横山、渡辺、中原、加藤、木村、石川、野辺地、仁茂田  
別枠右列上から：磯田、並木、今井、山崎 左列上から：長谷部、白川、小林、下田

**谷山 博史** 代表理事  
辺野古・高江に通って6年目。  
今年の正月は今帰仁の浜で思  
いっきり三線を弾きました。

**磯田 厚子** 副代表／非常勤  
母の大腿骨折で、初めて介護保  
険申請。家の改装や介護の仕組  
みを知った。良くない？

**長谷部 貴俊** 事務局長  
娘が第一希望の高校に入学でき  
たこと。

**細野 純也** 事務局長  
UEFA CLや五輪から極東の島  
国の都リーグ2部まで、それぞれ  
にサッカーの楽しみがあることを  
実感。

**山崎 勝**  
カンボジア事業担当／非常勤  
徐々に学生になり新しい出会い  
や発見がたくさんありましたが、  
一番は家でおいしいご飯を食べ  
られたこと。

**木村 茂** ラオス事業担当  
タイとラオスの歴史に影響を与  
えてきた英・仏の首都を訪れるこ  
とができたこと。

**下田 寛典** タイ事業担当  
誕生日の端々を伝えてないのに  
会話の端々でそれと悟ったお店  
からケーキのプレゼント!

**渡辺 直子**  
南アフリカ事業担当  
飼ひ猫が、はからずも3匹→7  
匹に増えたこと...? 大変だけど  
日々幸せを感じています。

**今井 高樹**  
人道支援／平和構築グループマ  
ネージャー  
十年前に難民キャンプから南  
スーダンに帰還してJVCの研修  
を受けた若者たちとの再会。

**小野山 亮**  
アフガニスタン事業現地統括  
黄金のアフガニスタン展と黄金  
の平泉に行く。文明が行き交う。  
両者もつながっている。

**加藤 真希**  
アフガニスタン事業担当  
甘酒が好きになり、自分で米と  
こうじから美味しく作れることに  
気づいたこと。

**小林 麗子** スーダン事業担当  
息子が新しい保育園にも慣れて、  
日々元気です！すくすく成長してく  
れたこと。

**池田 未樹** イラク事業担当/  
アフガニスタン事業担当  
お隣の神社の夏祭りにマーガレ  
ットと出演! え、音痴なのに!? 私は  
ウクレレ演奏～。

**中野 恵美** イラク事業補佐/  
非常勤  
家族で劇団四季の「マンマ・ミー  
ア」を観劇、フィナーレでみんな  
一緒に踊ったこと。

**寺西 澄子** コリア事業  
11月のソウルにしては珍しく暖  
かい晩、外で友人たちとチキン&  
麦酒。政治話、尽きず。

**並木 麻衣** パレスチナ事業  
半年の駐在を終え帰国した私。  
2歳の娘はママを忘れず、抱きつ  
て喜んでくれました。

**白川 徹** 震災支援担当・南相  
馬 ※今年度前半は育休中  
息子が誕生しました。そのかわい  
さに毎日キュン! としています。

**横山 和夫**  
震災支援担当・気仙沼  
夏休みの青森への旅行。白神山  
地、岩木山に登り、金木にも初め  
て行きました。

**宮西 有紀** 広報／ファンレ  
イジンググループマネージャー  
待ちに待った夏休み! 目が覚めた  
ら乗る予定だった新幹線が出発  
したあとだった。笑。

**大村 真理子** 広報  
ずっと行きたかった国立民族学  
博物館に行けたこと! 興奮しすぎ  
て大変でした。

**野辺地 和郎**  
ファンレイジング担当  
2匹の子犬が家族として加わり、  
すべてが犬中心の生活となった。

**石川 朋子** コンサート事務局  
保育士試験に合格! したら、家族  
が「がんばった、すごい!」とほ  
めてくれたこと。

**仁茂田 芳枝**  
カレンダー事務局  
野外音楽イベント「フジロック」に  
行ったこと。最高の仲間と最高の  
時を過ごせました。

**中原 和江** 経理担当  
何と言っても、カンボジア・ラオ  
スの活動地に行き、沢山の方や自  
然に出会えた事です!!

**稲見 由美子**  
経理担当／労務担当  
4年間の受験生の母生活から開  
放され、家族が大病もせず過ご  
せたこと。

## カンボジア事務所

前列左から: リッツ、ピー、レアッスミー、ソポアン、エン、ソマッチ  
後列左から: プンルウン、コン、ブンヒエン、(長谷部、山崎、)チェンガウ



ポク

**パオ・リッツ**  
運転手/総務補佐  
11月に家族7人でシェムリアップへ旅行へ行った。

**プム・ブンルウン**  
運転手/総務補佐  
3人の子供のうち一人、26歳になる息子が結婚した。

**チン・ブンヒエン**  
警備  
新しい携帯電話とセカンドハンドのコンピュータを購入した。

**ミエン・ソマッチ**  
農業プロジェクトフィールドスタッフ  
娘が、学校の試験で、クラスで一番良い点数を取った。

**チャン・ポク**  
農業プロジェクトフィールドスタッフ  
赤ちゃんを出産し、しかも女の子だったこと。

**パート・ピー**  
環境教育プロジェクトフィールドスタッフ  
iPhone5とセカンドハンドのバイクをゲットした。

**ケン・ソポアン**  
シェムリアップ事務所経理/総務担当  
姉から携帯電話を譲ってもらった。

**ヘン・チェンガウ**  
ブンペン事務所総務担当  
6年目の結婚記念に家族が大勢集まりお祝いごとをした。

**チャン・レアッスミー**  
ブンペン事務所会計担当  
水かけ祭りの時期にコンボンムというビーチへ家族旅行したこと。

**イン・コック・エン**  
TRC司書  
大家さんに中国正月のお祝いギフト(赤い袋に入ったお年玉)をいただいた。

**ポーク・コン**  
シニアオフィサー  
(病気療養中につきコメントなし)

## 南アフリカ事務所



左から:  
モーゼス、フィリップ、ドッドゥ

**ドッドゥ・レンガビンデ**  
プロジェクトコーディネーター  
プロポーズされたが、2016年抱負は達成できず。最良の思い出? そんなものはない!

**フィリップ・マルレケ**  
プロジェクトフィールドアシスタント  
2016年7月6日、2016年で最も幸せな日だった。次男誕生。幸運に包まれた。

**モーゼス・シャバナ**  
経理担当  
2016年9月4日11:30am、自分の人生で最良の瞬間。この日、長男が生まれるという幸運に恵まれた。

※↑ 昨年の本誌no.320掲載「2016年度の抱負」とぜひ照らし合わせてみてください!(渡辺)

## スーダン事務所



左から: モナ、橋本

**橋本貴彦** 現地駐在  
次女が希望の高校に合格したこと。

**モナ・ハッサン**  
現地代表補佐  
日本を訪れ、日本のJVCのスタッフと会えたこと。

**イスマイル・ゴンマ**  
カドグリ事務所チームリーダー  
最愛の女性と結婚できたこと。



左から:  
サラ、イスマイル、アハメド、サイーダ

**サラ・モゴ**  
フィールドオフィサー  
研修を受けて、エクセルの使い方を覚えたこと。

**サイーダ・アルファキ**  
フィールドアシスタント  
結婚が決まったこと。

**アハメド・アルハーディ**  
フィールドアシスタント  
JVCのスタッフになれたこと。

## エルサレム事務所



左: 山村 右: 井川

**山村 順子** 現地駐在  
世界青年の船と一緒に参加した海外青年たちと下船後にバーレーン、UAE、日本で再会できたこと!

**井川 翔** 現地駐在  
米国の壮大なスペリオル湖の周辺に住むオジブワ族と白人住民に出会い、彼らの地元愛を知ったこと!

**金子 由佳**  
現地代表/休養中

## 気仙沼事務所

左: 岩田 右: 伊藤



**岩田 健一郎** 現地代表  
福岡県直方市と徳島県牟岐町に足を運んだ新婚旅行。日本の地域は本当に奥深い!

**伊藤 祐喜** 震災支援担当  
大好きなロックバンドのライブに行くことができた。

## 在タイ



**森本 薫子** タイ現地調整員  
タイの田舎に住みながら、近所(車で30分)に日本人の友達ができたこと!女子トーク!!

# JVC STAFF 去年一番の思い出を教えてください。

## アフガニスタン事務所



左から：ワハーブ、イサヌラ

左から：  
ファジーラ、ファティマ、  
イザトウラー、サビルラ、アジマール、  
トラブ・ハーン、ザビウラ、サファラガ、  
アガ・グル・パチャ、ラヒーム、  
シャー・モハンマド、ラジーク、  
ザマヌラ、デラワール

**サビルラ・テムラル**  
副代表  
平和教育に200人が参加し、チームの活動として帰還者に1,177着の衣料を提供したこと。

**アブドゥル・ワハーブ**  
プログラムコーディネーター  
4人の小学生の子どもたちがそれぞれクラスで成績一番になったこと。

**アジマール・クラム**  
教育コーディネーター  
一人目の息子を失くしたあと、昨年11月に新たな息子アギガが生まれたこと。

**ザビウラ・ザマンザイ**  
教育補佐  
人生のパートナーを得て、婚約をしたこと。

**ファティマ・カディム**  
地域保健推進員  
嬉しかったことは思い浮かばない。国の状況は悪く、ISと政府の戦闘によって子どもたちが犠牲になっているから。

**モハンマド・ラヒーム**  
地域保健推進員  
心臓が悪いと心配していた息子が、エコー検査の結果、医師から問題ないと言われたとき。

**サイード・サファラガ**  
物資調達担当  
娘がコーランを読んだ時と彼女が学校で良い成績を取ったこと。

**イサヌラ・ハタック**  
経理担当  
ガニ大統領とインドのモディ首相がアフガン-インド友好ダムを竣工を祝賀したこと。

**トラブ・ハーン** 経理補佐  
2015年に肝炎に罹っていた父が快復したことが家族にとって嬉しかった。

**デラワール** 守衛主任  
アフガンのクリケットチームが国際大会で西インド諸島に勝利したこと。

**イザトウラー** 守衛  
仕事から戻り、飼っている牛の出産に立ち会えたこと。

**アブドゥル・ラジーク** 守衛  
政治家ヘクマティヤールと政府が和平交渉を始めたとき聞いたとき。

**アガ・グル・パチャ** 運転手  
息子がコーランを読んだこと。

**シャー・モハンマド** 運転手  
次男が結婚したこと。

**ファジーラ**  
地域保健推進員補佐  
友だちから贈り物もらったこと。

**ザマヌラ** 守衛  
自分の娘が、マドラサ（イスラム教の学校）で一番の成績を取ったこと。

## ラオス事務所

後列左から：フンパン、シーサワン、山室、平野、ホンパソン  
前列左から：シウォン、オーワンティン、ホンケオ、ソムソン



チャイアン

**シーサワン・インタコン**  
フィールドオフィサー／担当：家畜  
4月のラオス正月に実家に帰り、各地に散っていた家族親戚みんなでお食事を囲んだ。

**オーワンティン・テパヴォン**  
フィールドオフィサー／担当：ラタン栽培  
結婚して新たによい家族を得られたこと。

**ホンケオ・ドウォンディー**  
フィールドオフィサー／担当：共有林  
カンボジアに初めて行き、メコン川とトンレサップ川の合流するところを見られたこと。

**平野 将人**  
現地代表  
メコン川で釣りをしたこと。

**山室 良平**  
現地駐在員  
JVCラオスに入れたこと。

**ホンパソン・タマヴォン**  
運転手  
1月1日のインターナショナルニューイヤー。古い年が行き過ぎ、新しい年が来たから。

**フンパン・センチャントン**  
プロジェクトコーディネーター、ローカルスタッフリーダー／担当：農業、農村開発  
娘が大学を卒業し、修士課程に進学したこと。

**シウォン・サイヤベット**  
会計・総務担当  
4月のラオス正月に実家に帰り家族親戚で魂の結びつきを強めるパーシーの儀式をした。

**ムソン・ドッサニー**  
フィールドオフィサー／担当：魚保護区  
4月のラオス正月に実家に帰り、近くの川で家族やみんなでお水遊びをしたこと。

**チャイアン・チューヴァ**  
フィールドオフィサー／担当：土地利用計画  
土地利用計画の活動と地図作成のトレーニングに行けたこと。

## 政治の歪みを質さない日本

調査研究・政策提言担当 高橋 清貴

今回は、プロサバンナ事業の対象であるモザンビークの国家財政の状況と、それに関連しての日本政府の外交姿勢に関して取り上げる。ただでさえ遠いアフリカの、日本が関わっている援助事業とは言えその背景にある事柄、と捉えてしまえば、自身との関わりを見出すのは難しいかもしれない。

しかし、人々の暮らしが時の政治や経済に大きく左右されるのはどの国でも変わりはない。私たちはそれを、どこまで意識できるだろうか。

## 深刻な財政問題とガバナンスの欠如を抱えるモザンビーク

今年3月、ニユシ・モザンビーク大統領が急遽、来日した(注1)。外務大臣、農業大臣など閣僚を伴った大きな公式訪問だったが、同時期のサウジアラビア王様の「大名行列」によって、影に隠れてしまった。しかし、同国政府にとっては急を要した重要な来日だった。なぜなら、モザンビークは今、深刻な借金状態にあり、信頼回復のためにもどうしても日本からの投資と支援の約束が必要だったからだ。

この数年でモザンビークの対外債務は急増した。現在、民間を含め債務残高は100億ドルを超え、対GDP

比130%に接近するに至る。そして今年1月、600億円の金利が返済できず、同国はアフリカでは2011年のコートジボワール以来のデフォルト(返済不能状態)に突入した。

債務急増の主たる理由は、一次産品(主に鉱物資源)の価格低迷である。鉱物輸出は外国資金に依存するモザンビークの外貨獲得の唯一の資金源だが、価格低迷で為替が下落し、債務が一気に膨れ上がったのだ。同国経済は外国資金と資源輸出に依存する脆弱な基盤の上になりたつていて、債務超過に陥りやすい。そして、それに拍車をかけているのが政権の政治運営の拙さである。未熟なマネジメントや不透明な財政運営にも関わらず、外国投資家が急速に資金を流入したた

め汚職や腐敗を招きやすい環境をつくってしまったのである。先の金利返済ができなかった債務、20億ドル(約2200億円)も政府関係者が関与するマプロ漁業会社が借り受けたもので、現地報道によればその金が紛失し、一部では与党フレリモの軍事活動費に回ったと言われている。これでは、穴の空いたバケツにカネをつぎ込むようなものだ。IMFも、債務急増の根底にあるガバナンスに改善の余地が見込まれないとして融資を凍結した。そして、とうとう民間投資家も1月の不払いでそっぽを向いてしまった。八方ふさがりとなったモザンビークが救いを求めたのが日本である。

## 「政治的判断」のしわ寄せが他国の農民へ

案の定、モザンビークを定がかりにアフリカ進出を果たしたい日本は彼らを歓迎した。しかし、日本政府も一枚岩ではない。来日直前、財務省の担当者と話をする機会を得たが、彼らは債務状況だけでなく、ガバナンスの悪さに憤っていた。モザンビーク政府が提案する改善計画も、鉱物資源頼りでパブルの再来を願うようなもので、素人がみても健全性や可能性は低い。担当官も「日本の民間投資家も、そこまでバカではない」とまて言っていた。しかし、外務省は別である。年度内というタイミングでもあり、振り分けられた外務予算算の活用と将来への約束で関係維持を図った。

34億円相当の無償資金協力による橋

梁整備計画に関する書簡を交換し、3月15日に発表した日・モザンビーク共同声明では、わずかに債務問題に言及したもののガバナンス問題は不問に付し、安保理改革や北朝鮮問題などの「国際場裡における協力」を含めて「アフリカの一票」を確保したのである(注2)。プロサバンナ事業についても、農業開発と食料安全保障にとって重要であると言及し、実施継続の可能性を匂わせている。あれだけ問題を孕みながら見直す気がないらしい。

ガバナンス悪化と債務超過は、早晩、市民の暮らしにしわ寄せとなって表れるだろう。治安が悪化し、物価が高騰するからだ。加えて、プロサバンナ事業によって生業を破壊された小農たちの生計手段を奪っていくだろう。農民の声を聞かず、丁寧なプロセスも踏まらず、援助がもたらす影響を慎重に考えず、ガバナンス問題にも毅然と対応せず、ご都合主義的外交で政府支援を続けられ、農民や庶民の暮らしを直接／間接に苦しめる。援助が外交ツールであることによって、人々に二重の苦しみを味あわせることになることへの自覚と責任意識を欠いてはいけない。

そう言えば、日本は、サウジアラビア国王訪問の際、国内で酷い人権侵害を続けている問題やイエメンなど他国で犯している戦争犯罪を問はずしたのだから。メディアの報じないところで数多くの歪みが生まれている。私たちはもっと意識を向けなければいけないようだ。

◎注1…外務省サイトより。http://ngo-jvc.info/2nZD7NP  
◎注2…外務省サイトより。http://ngo-jvc.info/2ohKqmU

# イベントあらかると

1月～3月

イベント・ピックアップ!

3/9(木) 東京・JVC東京事務所

## JVC東日本大震災活動報告会

復興の今/これから ～コミュニティの再生と向き合った6年～

広報担当 大村 真理子



会場からの質問にこたえる白川(左)と岩田(右)

7年目の「3・11」が迫る3月9日、JVC東京事務所東日本大震災活動報告会を開催しました。登壇はJVC気仙沼事業現地代表の岩田と、南相馬事業担当の白川。岩田は2011年5月に参加した気仙沼でのボランティアをきっかけに、同年6月からJVC震災支援担当として着任。白川はジャーナリストとして活動する中で、「伝えるだけでなく、実際に現場で支援すること」を志してJVCに参加、今に至ります。

岩田からは、気仙沼での震災直後の活動から、現在取り組んでいる仮設住宅を出た後の「新たな集落」での支援活動について報告しました。JVCが活動する気仙沼市浦島地区の震災前世帯数は241、それが震災後70まで激減し、現在は135世帯が暮らしています。もともと相互扶助の精神が強く、深いつながりの中、

集落単位で暮らしてきた地域の皆さん。被災後、バラバラでの仮設住宅への入居、公営住宅への引っ越しなど、何度もそのつながりが途切れてきました。JVCには途切れたつながりを再生するための活動が求められており、気仙沼事業は岩田を中心に、来年度は地域復興に向けた住民有志のNPO立ち上げをサポートする予定です。

白川からは、原発事故によって複雑さを極める南相馬市での活動報告を。地震被害に追い打ちをかけるように起きた原発事故。気仙沼同様、部落の強い絆のもと暮らしていた地域に、事故による「分断」が occurs。津波被害も大きかったこの地域に、「お向かいが原発から半径20キロの警戒区域で自分の家はギリギリ区域外」など、ボーダーラインならではの繊細な問題が襲い掛かりま

した。それでも地元の皆さんは、「ラジオをつかって分断を乗り越えられないか。皆で考えたり話したりする場所になれないか」と、JVCとともに立ち上げた災害FM局を活用するなどして、前に進んできました。白川は言います。「地域の人にしか解決できない問題は確かにある。だけど、目的がたつまで伴走者になることは自分にもできる。最後のコミュニティづくりまで一緒にやりたい」と。

震災から「まだ」6年。失われたものの大きさや歴史を考えれば考えるほど、その再生には長い時間がかかると感じます。JVCの東北での活動も7年目の春を迎えます。この号が発刊される頃は、東北の桜がきれいな時期ですね。これからも応援よろしくお願いいたします。

### その他の主なイベント

1/13(金) 滋賀県大津市【講演】

南スーダンはどうなっているのか

1/14(土) 神奈川県鎌倉市

映画『ボパティエ・インク ～あなたの寄付の不都合な真実』上映会

1/25(水) 北海道札幌市【講演】

南スーダンPKO自衛隊派遣問題を考える～現地南スーダン駐在からの報告～

1/25(水) 東京都港区

食料危機アラートはどうやって出されるのか? FAOの情報にアクセスして考える世界の食料問題

1/26(木) 北海道札幌市【講演】

南スーダンの現地情勢と自衛隊派遣を考える～NGOの支援現場から～

2/3(金) 東京都台東区

アフガニスタン現地スタッフによる活動報告会

2/4(土)、2/9(木)、2/13(月)、2/23(木) JVC東京事務所  
2017年度JVC東京事務所インターン説明会

2/4(土)～2/5(日) 大阪府大阪市【出展】

ワン・ワールド・フェスティバル

2/8(水) 東京都世田谷区

会員・マンスリー支援者のつどい:アフガニスタン活動報告

2/11(土) 東京都港区

シリア人専門家と対話する中東フォーラム

2/11(土) 東京都台東区

アフリカからやって来た障害者 日本、そしてアフリカの障害者を取り巻く環境について

2/17(金)～19(日) 東京都千代田区

第16回 南北コリアと日本のともだち展

2/18(土)～19(日) 宮城・気仙沼市

週末は気仙沼 ～海の仕事と人に出逢う旅2017～

2/23(木) 東京都文京区

南スーダン現地派遣職員 緊急報告会

2/24(金) 東京都千代田区

土地収奪とアグリビジネス

2/24(金) 東京都・JVC東京事務所

JVC会員限定:会報誌特集「東エルサレム。非暴力の解放運動」解説会

2/25(土) 富山県黒部市【講演】

日本が目指すべき国際社会の平和とは?

2/26(日) 東京都稲城市【講演】

南スーダンのいまを知ろう

3/18(土) 新潟県新潟市

国際協力と新潟の地域づくりは両立できるのか!? 持続可能な開発目標(SDGs)を知る・新潟で広める

3/20(月祝) 東京都新宿区

映画『遺伝子組み換えルーレット』&『fire in the blood』上映会

3/22(水) 東京都・JVC東京事務所

パレスチナ・イスラエルで、アラブ系ユダヤ人が架け橋になれる日まで

3/23(木) 京都府京都市【講演】

南スーダンの現状と国連PKO活動の変質

3/24(金) 東京都・JVC東京事務所

トランプ政権で揺らぐ世界情勢を考える会

3/25(土) 東京都台東区

美味しいアフガン 第2回(料理会)

3/26(日) 東京都世田谷区

中高生向け人権セミナー 人権×多様性×リアルな幻日をどう生きるか?



## JVCとアフリカと マラソンと私

JVC会員  
アフリカボランティアチーム  
中村 俊哉



私がJVCに関わるようになったのは4年前です。それ以前から東北の震災被災地の復興応援活動を続けていたのですが、横のつながりを作ろうと、様々なNGO/NPOが集つイベントを訪れ、そこでブースを出していたJVCアフリカチームと出会ったことがきっかけでした。

以後、オリエンテーションを経てアフリカチームに参加し、国内だけでなく、海の向こうで困難の中にある人々のためにできることを模索し、活動を行ってきました。具体的には、定期的なフリマに出店してその収益をJVCのスタータンや南アフリカの支援事業に寄付する、在日スタータンの方を講師にお招きして料理会や座談会を開催し、参加者にアフリカへの理解を深めていただく、など。個人的にも2014年の末に南アフリカへ旅する機会に恵まれ、そこに暮らす人々が歴史的背景のために苦しんでいる現実を垣間見ることができ、その後の活動へのモチベーションとなりました。

の活動です。元々私は趣味でランニングをしており、月に1〜2回はマラソンの大会に出ているのですが、ある時、スタッフの石川さんに「かつてアフリカチーム内にあつたというマラソン部を復活させたい」という思いを伝えたところ、実現に向けて動いてくださり、「JVCラン部」が立ち上がることになったのです。

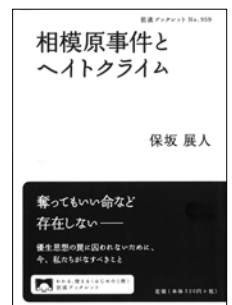
ランニングに興味のあるメンバーに声を掛け、年初めの練習会を経て、5人で3時間のリレーマラソンに参加。雪の降る中で襷をつなぎ、完走を果たしました。その後も月に1〜2回、皇居周辺にて練習会を行っています。今後も様々な大会に出場し、いつかは皆でホノルルマラソンを完走できたらと思います。

JVCラン部では新メンバーを募集しています。初心者大歓迎！もちろん、アフリカチームでもメンバーを募集しております。こちらは毎週火曜夜に活動中です。純粋にアフリカの風土や文化に興味があるという方も、ぜひ一度、見学にいらしてください！

### おすすめ本

## 『相模原事件と ヘイトクライム』

保坂展人著 岩波書店  
2016年11月 520円(税抜)  
会員・支援者担当 宮西 有紀



ニュースを目にした誰もが驚愕したであろう相模原障害者施設殺傷事件が起つたのは2016年7月。世田谷区長でもあり、ジャーナリストでもある著者は、「飲み込もうとした『異物』が逆流してくるような嫌悪感」に襲われたとして、その気持ちを事件直後からツイートしている。その後、容疑者の「主張」がメディアで報道される中で「その出張への」部分肯定論の広がりを感じ取った著者は、自身のブログへ緊急寄稿した。本書は、そのブログの内容をまとめたもので、「事件そのもの」よりも「事件の波紋」を追っている。

容疑者の「主張」の根幹にある「優生思想」は、いまに始まったものではない。本書では、ナチス・ドイツの「T4作戦」について触れられている。ナチス・ドイツが、多くのユダヤ人などを虐殺したことは周知の事実だが、それより前に「障害者」「安楽死」計画」が組織的に実行され、20万人以上のドイツ市民が命を落としていたことはあまり知られていない。これは、いわば「ホロコーストの「リハーサル」」だったように。

しかし、これはナチスだけの問題ではない。「優生思想」は戦後の日本でも存在し、1948年制定の「優生保護法」がその代表例に挙げられているし、昨今の在日コリアンなどマイノリティに対するヘイトスピーチ/ヘイトデモがまさにそうである。これが大きな社会問題となり、その結果、「ヘイトスピーチ解消法(本邦外出身者に対する不当な差別的言動の解消に向けた取組の推進に関する法律)」が2016年5月に制定された。これは、初めての反人種差別法ではあるが、残念ながら差別的言動の禁止事項が入っているわけではなく、「不当な差別的言動は許されないことを宣言」した「理念法」にとどまっていることなど、さらなる改善に向けての指摘もなされている。

国内の障害者支援に長年携わっている藤井克徳氏は、本書のインタビュで「差別的反対は無関心、これが一番の曲者で怪物」と発言している。私たち自身が「当事者」となり得る「日本の現代社会に潜む暗闇」から目を背けないよう、「隣人」に関心を持つ時なのかもしれない。

# お知らせ

## 第18回 JVC 会員総会のご案内

年に1回、多くの会員の方々と一同に集える場である会員総会を今年も開催いたします。JVCの活動を通して世界各国の課題を共に考える場でもあります。  
議案書は、別途6月初旬にお送りいたします。

日 程：2017年6月17日(土) 10:00~13:00 (予定)  
場 所：渋谷区 東京ウィメンズプラザ 視聴覚室  
議 案：1) 2016年度活動報告および決算報告  
2) 2017年度活動計画および予算案

例年と同様、総会終了後の午後に、「会員のつどい」を企画しておりますので、こちらをご参加ください。参加される場合には昼食をご持参ください。

## 2017年度もNGO相談員受託決定

JVCは、外務省のNGO活動環境整備支援事業「NGO相談員」を2017年度も受託しました。  
「NGO相談員」は、ボランティア参加、国際協力やNGOに関する質問・相談等に対して、情報提供やアドバイスをを行います。地域の国際協力イベントでの相談ブース出展や、講師派遣などの「出張サービス」も実施しておりますので、お気軽にご相談ください！

## 「冬の募金」報告

2016年「冬の募金」へご協力いただき、ありがとうございました！ ※指定寄付/無指定寄付すべてを含みます

11月24日~2月28日集計

1,132件 11,318,725円

## 募金集計

募金にご協力ありがとうございます。  
JVCの活動は、皆さまの募金によって支えられています。  
JVCへの募金は、税制優遇措置を受けることができます。

指 定 先	期 間 (12~2月)
無 指 定	17,410,548
タイ	14,851
カンボジア	398,291
ラオス	1,398,528
南アフリカ	100,190
アフガニスタン	711,073
イラク	277,667
スーダン	1,732,345
パレスチナ	1,426,657
南タイ	22,000
コリア	350,438
東日本大震災	1,984,458
みどり一本	139,946
東京管理	82,324
調査研究	51,500
コンサート	2,451,414
合 計	28,552,230円

※上表に「夏/冬の募金」も含まれます。

## JVC国際協力カレンダー2018は長倉洋海氏の作品に決定!

収益がJVCの活動につかわれる国際協力カレンダー。長年にわたりご愛用くださる会員の方も多く、ありがとうございます。累計約50万部を販売し、リピーターのご愛用者も多いJVC国際協力カレンダーは、毎年、第一線で活躍する写真家の方々に選りすぐりの写真をご提供いただき制作しています。  
2018年のカレンダーの写真家は、長倉洋海さんに決定いたしました。5年ぶり5回目の登場です。  
長倉さんが世界中で撮ってきた作品の中から、世界各地の人々の「暮らし」「気持ち」が伝わる心あたたまる写真が、日々の生活をいろどります。

JVC国際協力カレンダーは、**2017年9月1日発売**です。  
どうぞお楽しみに!

## 人 事

### 入 職



井川 翔  
エルサレム事務所現地調整員(4月1日付)

イラクとパレスチナ事業のボランティアを経て、この度入職いたしました。数年前、ヒップホップダンスを日本で始め大好きになり、現地では「dabke」を踊れるようになりたいです。最近は人々が助け合うコミュニティーづくりに関心を膨らませ中。

### 異 動

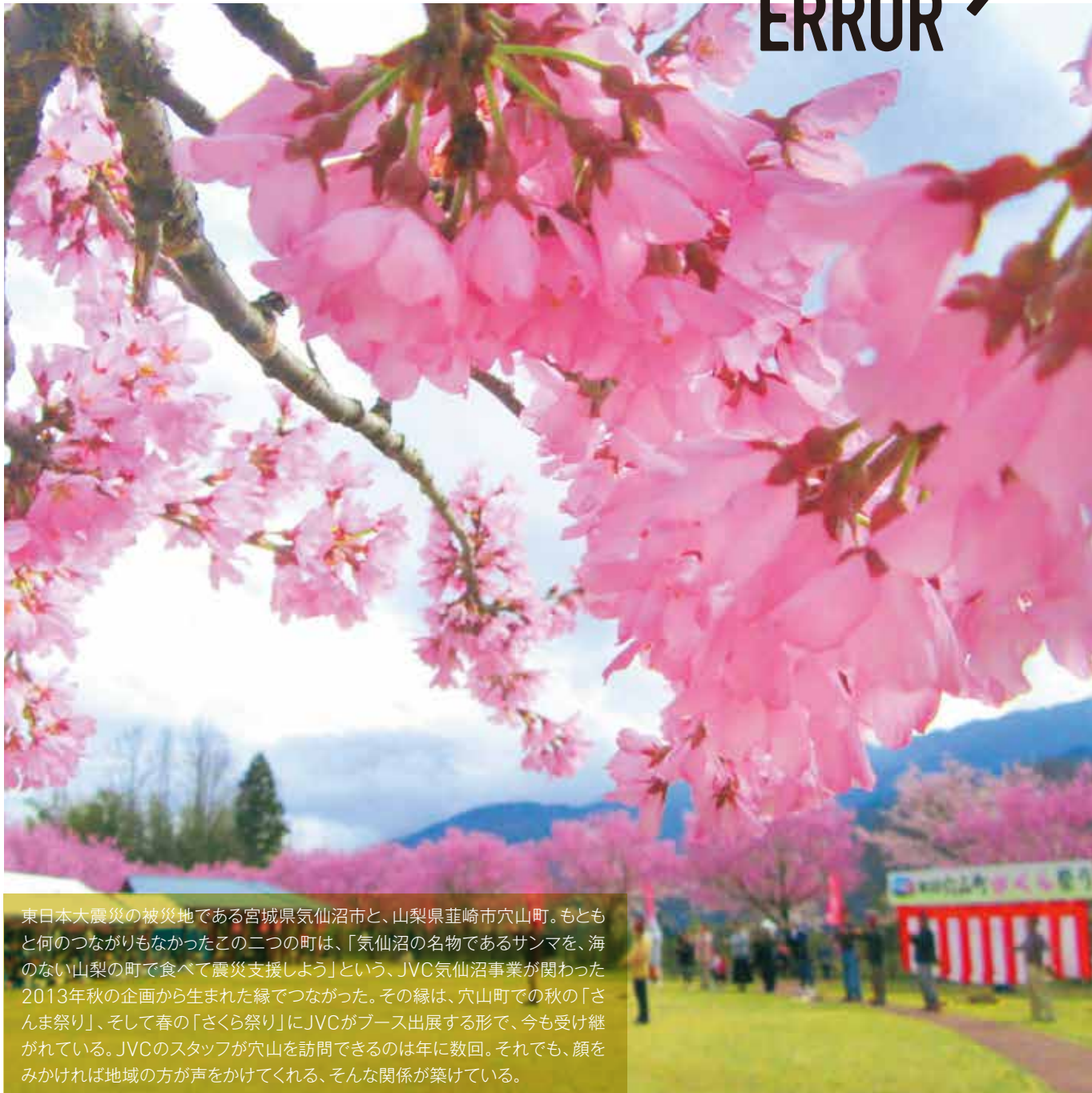
- 今井 高樹 南スーダン事業担当  
(スーダン事務所現地代表より：1月16日付)
- 橋本 貴彦 スーダン事務所現地調整員  
(カレンダー事務局より：2月1日付)
- 山村 順子 エルサレム事務所現地調整員  
(パレスチナ事業担当より：2月1日付)

### 育児休暇

- 白川 徹 南相馬事業担当  
(4月1日~9月11日予定)

## 編集後記

JVCスタッフとして1980年代に2年間ソマリアに滞在した際、隣国から流入した難民は70万人。当時は世界最多の難民と言われた。今は一桁違う。ソマリアでの飢饉民は620万人。シリア難民400万人、イラクの国内避難民320万人…。巻頭特集で描いた「トランプ的世界」はこの混迷を深めるのか？ だが情けなくも、ソマリアでは肌からしみたあの光景も、今では「たいへんだな」と頭で理解するだけ。短期間でも世界の現場に立とうか。その思いが頭をよぎる今日この頃です。(檜)



東日本大震災の被災地である宮城県気仙沼市と、山梨県韮崎市穴山町。もともと何のつながりもなかったこの二つの町は、「気仙沼の名物であるサンマを、海のない山梨の町で食べて震災支援しよう」という、JVC気仙沼事業が関わった2013年秋の企画から生まれた縁でつながった。その縁は、穴山町での秋の「さんま祭り」、そして春の「さくら祭り」にJVCがブース出展する形で、今も受け継がれている。JVCのスタッフが穴山を訪問できるのは年に数回。それでも、顔を見かければ地域の方が声をかけてくれる、そんな関係が築けている。



特定非営利活動法人  
日本国際ボランティアセンター

日本国際ボランティアセンター（Japan International Volunteer Center）は、1980年2月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVCの活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられるアジアやアフリカ・中東の人びとに協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係をつくり出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志でJVCに参加し、活動を継続してきました。JVCはボランティアという言葉で、「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

#### JVCでは会員を募集しています

会員数（4月1日現在） 合計1,003名（正会員554名 賛助会員449名）

会員は総会に出席し、JVCの方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会等へ参加することができます。会員の方には年4回この会報誌と年次報告書をお届けします。入会のお申し込みや、会員の方の住所変更などは会員担当の宮西まで。

メールアドレス [miyanishi@ngo-jvc.net](mailto:miyanishi@ngo-jvc.net)

- 一般会員 10,000円
- 学生会員 5,000円
- 団体会員 30,000円

それぞれに正会員と賛助会員があります

#### JVCのオリエンテーション（説明会）にお越しください

JVCの活動内容をご紹介します。お気軽にご参加ください。【事前にご予約ください】

会場 JVC東京事務所 参加費 無料

第1月曜日 午後7:00～8:30  
第2・第4土曜日 午後2:00～3:30

ウェブサイト <http://www.ngo-jvc.net/>

メールアドレス [info@ngo-jvc.net](mailto:info@ngo-jvc.net)

Facebook [NGOJVC](#)

Twitter [@ngo\\_jvc](#)

